

# 【ねがいましては】

第41号

平成4年1月25日  
共和珠算塾 新浜

今年はサル年、先日新聞に、母子関係に関する記事が載っていました。

青森県の下北半島には約三百頭のニホンザルがいる。「北限のサル」として有名だ。その中の一頭、メスの子ザル「モモ」が、サル年の正月を前にひっそりと死んだ。

生後七カ月のモモは昨秋、群れ同士の争いに巻き込まれ、母親とはぐれた。別の群れに入れてもらおうと接近したが受け入れてもらえず、右足をかまれ七針も縫う大けがをした。

動物写真家で獣医の松岡史郎さん(37)が治療して群れに返した。今度は強いオスザルに抱かれ、受け入れられたように見えた。が、大みそかの朝、神社の境内で死んでいるのが見つかった。松岡さんは「外傷もなく、ほお袋には食物も残っていた。緊張が続いて衰弱死したのではないかと肩を落とす。母子関係、群れのおきてと、サルの生態にはわからないことが多い。

従来、ニホンザルの群れにはボスがいて、仲間を統率しているといわれてきた。だが最近の研究では、群れにはボスは存在せず、移動などの際には多数決の原理が働くという(立花隆著「サル学の現在」平凡社刊)。

サルは互いに他のサルの動きを気にしている。誰かが動くと、それに引きずられて一つの流れができる。日本の社会とよく似ているそうだが、母子のきずなを断たれ社会の流れに乗り切れなかったモモが哀れだ。 —読売新聞(編集手帳)より—

母子のきずなを改めて深く考えさせられる記事でした。今の子どもたちの目に母がどのように映っているのか、はたして健全なきずなで結ばれているのか、体の傷は分かっても、心の傷は分からない。

真に「やさしさ」と「おもいやり」のある子はひょっとしたら、お母さま方がお考えになっているよりも、もっともっと深い傷を心に負っているような気がします。

たとえば、ある日、お母さんは機嫌が悪かった。人間です。仕方のない時もあります。その子は、お母さんに当たられた、だまって聞いていた。母親はこの子のことを芯の強い子だと思う。言われ強い子だと思ってしまう。ところがその子は実は、お母さんが今、辛くてくじけそうなのだから、私がしっかりしなければ共倒れになってしまうと思い、表情一つ変えずに聞いた。もし、途中で聞くのをやめてしまったら、お母さんはもっとつらいだろう。聞ききってあげることによって、お母さんの気持ちが楽になればいいと思った。お母さんの話を聞いたあと、お母さんは用事で外へ出かける。残された子はそっと自室で涙を流す。

ここで大事なことは、母親がこの気持ちをわかっているかということです。ひょっとすると「この子は気が強い子だ」になってしまいます。

そのようなことが繰り返されると、母子のきずなは次第におかしくなっていきます。

真の「やさしさ」と「おもいやり」がかえって苦しみを倍加してしまうという、なんともいえない、苦しいものが私自身を包みます。

今思うことは、それでも、それでもねー、きつとねー、心の底から「あー、これでよかったんだ」って思えるときが必ずあることを信じて毎日を送ってほしいと思います。

見えるようで 見えない 子のころころ・・・

## ★2月の予定

2月	1日(土)	4～10級 検定試験・・・共和珠算塾
	2日(日)	3級以上 検定試験・・・中央商業高校 *集合時間等は直接本人にお知らせします
	8日(土)	臨時のおやすみです
	13日(木)	検定試験合格発表